

つなぐ

J E F 60周年を迎えて

～先輩から・後輩から～

日本教職員バドミントン連盟創立60周年を迎えて、先輩から・後輩からその思いをつなぐ多くのことが寄せられました。それぞれの想いを受け止めながら、本連盟が更なる発展をすることを願っています。順不同で紹介します。

JEF60周年に思う ～私の人生を変えた日本教職員バドミントン連盟～

鳥取県 辻中 孝彦

1994年広島アジア大会が開催された。この時、私はバドミントンの競技通訳として大会運営の全般の通訳に当たった。記者会見、新聞取材等々。でも久しぶりのバドミントンとのかかわりがとてもうれしかった。

当時私は予備校の英語講師として受験生の指導に明け暮れる毎日であった。朝は早く夜は遅い生活、もちろんバドミントンに係る時間も持てていなかった。「自分はバドミントンが好きなのに…」という思いがあり、またバドミントンの競技者としてもう一度自分の可能性を試してみたいという気持ちが心の中で巡っていた。平成7年、私の地元、鳥取県米子市で全日本教職員大会が開催されることになった。大会会場に足を運ぶ、するとそこには多くの大学時代の同級生が選手として大会に参加していた。大学時代の同級生との話が弾む…懐かしさがこみ上げてくると同時に自分の中にくすぶっていた「バドミントンの競技者としてもう一度自分の可能性を試してみたい」という気持ちに火が付いた一瞬であった。「私も彼らのように公立学校の教員になり、そして生徒にバドミントンを教え、そして全日本教職員大会に出場したい」と思った。その年、私は予備校に辞表を出し、31歳にして公立学校教員として歩むことを決めた。もちろん全日本教職員大会に出場するためである。

翌年の平成8年、私は鳥取県立鳥取西高等学校英語教諭として新たなスタートを切った。毎日の英語授業、バドミントンの部活指導…こんなに楽しい時間があるのか…充実した毎日が私を待っていた。その年、夢はかなった、千葉市で開かれた全日本教職員大会に初めて出場、バドミントン競技者として、またバドミントン指導者として最高の舞台に立ち、新しい人生のスタートを切ることができた。

教員として充実した日々を過ごす傍ら、平成12年私は国際審判員（BAのちにBWF）としてもスタートを切ることができた。このことにより国際審判員の大先輩、高橋英夫先生、今井正男先生、上田敏之先生方と巡り合うことができた。高橋先生、今井先生、上田先生との出会いは、また私の人生を大きく変えた。これらの先生方が日本教職員バドミントン連盟の役員として、競技規則の普及、日本の審判員の技術向上を目指し、組織として「日本のバドミントンの発展」に多大の貢献をされていることを知った。「100問集」の発行は、全国各地で審判講習会のケーススタディー事例集として多くの審判員の疑問を氷解させた。また、全日本教職員バドミントン選手権大会の「全国派遣審判員制度」は、各地方の審判員の方々の「審判資格を取ったからにはいつの日か全国大会の審判をしてみたい」という思いにこたえるもので、多くの地元審判員がこの制度のもと審判員としての誇り、自己有用感を育てていった。その功績は計り知れないと思う。

この功績に対して私ができること……平成28年全日本教職員大会の鳥取県鳥取市開催を引き受けたのも、「何とか日本教職員バドミントン連盟に恩返しをしたい」という思いからだ。

時代は令和になり、コロナ禍で日々学校業務に携わる自分がいる。昨年度より、鳥取県立岩美高等学校校長を拝命し、日々学校運営に当たっている。日本教職員バドミントン連盟、全日本教職員大会がなければ今自分がこうして教職員として勤務することもなかっただろうと思う。日本教職員バドミントン連盟へのさらなる「恩返し」を模索しながら、60周年へのお祝いのメッセージとしたい。

日本教職員バドミントン連盟創立60周年によせて

中国地区教職員バドミントン連盟

岡山県教職員バドミントン連盟

会長 平島 秀典

日本教職員バドミントン連盟の創立60周年、心よりお慶び申し上げます。

岡山県協会では、平成10年の創立50周年を迎えることを機会に「岡山バドミントン五十年」という記念誌を発刊しました。その中に、日本教職員バドミントン連盟の設立に関する記事を書いたことを「創立60周年」という言葉から思い出しましたので、岡山県の関わりも含めて少し紹介します。

日本教職員バドミントン連盟の設立

1956（昭和31）年頃より、「全国の教職員が一体となり、日頃の研究や体験を持ち 寄って、研修の場をつくろう」との声が東京、大阪等にあった。特に、東京都教職員 連盟のメンバーは、夏休みを利用して主な道府県に足を運び、練習試合で親睦を深め ながら、全国規模での教職員連盟設立運動を展開して廻った。岡山県では、1957（昭和32）年8月に山陽学園で一行を迎え、県内の有志5名（毛利清志、西崎正明、太田喜代志、渡辺弘美、藤沢更司の各氏）が、ラケットを交えながら対応した。

－中略－1961（昭和36）年9月、日本教職員バドミントン連盟が誕生し、同年10月7日、日本協会臨時総会で承認された。この間、当時の岡山県協会毛利清志理事長も、全国各地の有志数名と共に発起人に推され、JEFの設立に参画した。（「岡山県バドミントン五十年」より）

このようにして連盟の設立に関わり、第10回全日本教職員バドミントン選手権大会の開催も行いました。全日本教職員バドミントン選手権大会へ出場を重ねる中で、岡山県教職員バドミントン連盟も1967（昭和42）年の定期総会で承認され、設立されました。



また、JEF創設以来、関東や近畿などの各地区にも連盟が設立されてきました。中国地区においても、中国地区バドミントン協会傘下の中国地区教職員連盟が設立され、競技の研修と技能の向上を目指して、1991（平成3）年12月、米子市において、第1回中国地区教職員選手権大会が開催されました。

初代理事長の米田哲巳氏の熱意と努力により、鳥取県教職員バドミントン連盟会長を初代会長として組織の確立及び選手権大会の主催に大きく関わっていただきました。第1回大会は12月25日、18時より監督会議、19時より代表者会議がおこなわれ、鳥取県協会加藤博司理事長をはじめ、協会の方々に熱くもてなしていただいたのを鮮明に覚えています。26日・27日の2日間が競技日となり、この会議及び大会運営が後の大会のモデルとなりました。以来同大会は、発展の一途をたどりました。併せて、この大会が各県教職員連盟の大会運営や競技方法等の情報交換の望ましい場となったことは間違いありません。

しかし、近年は大会への参加者が激減しました。教職員の採用数の減少も影響しているでしょう。さらに30周年記念大会（岡山大会）及び31回大会が新型コロナウイルス感染症拡大のため中止となりました。中には、もう大会自体成立しないのではないかと危惧する役員もいます。

日本、中国地区、岡山県それぞれの連盟設立は多大な努力の賜です。その将来を見つめ、絶やすことなく、できる限りの知恵を絞り、バドミントン競技の普及に努めて参りたいと考えています。ば今自分がこうして教職員として勤務することもなかっただろうと思う。日本教職員バドミントン連盟へのさらなる「恩返し」を模索しながら、60周年へのお祝いのメッセージとしたい。

教職員連盟60年の活動をつなぐ

新潟県教職員バドミントン連盟

会長 福嶋 康夫

私が連盟に加盟して30数年たちますが、全国大会に参加したのは30歳の時からで、当時成壮年（男子）団体の30MDのパートナーを探していたことと、独身でいたことで全国大会に出ると言われ実力ではそんな大会に出られるレベルではなかったにも関わらずでした。バドミントンを始めたのも就職してからでしたので素人も同然で約10年後のデビューでした。就職当時の職場に国体選手（教職員の部？）の大先輩がいてその方と一緒にゲームをやることで技術を磨いていった感じで、基礎もないままに独自のプレーを進んできました。声を掛けていただいた先輩は高見廣治さんです。また、成壮年（男子）団体に出ていた先輩方は年齢別個人戦にも出場し入賞経験も多々ありました。なかなか優勝まではいかなかったのは、お酒と夜更かしだとの逸話が残っております。

新潟県の連盟の立ち上げより加盟されている佐藤俊夫先生もその1人です。

私が加盟した当時の会員数は現在の半分程度で、全国大会に参加する方々がほとんどだったと思います。なので全国大会に20名ほどは参加していたのではないかと思います。現在は、全国大会参加者は少数ですが会員数は60名程度で推移しています。会員の中心は高校の先生方で、会員を増やすための一つとして約30年前から高校生の初心者大会を開催しており、生徒を参加させるための条件が加盟としているためです。

今後も引き続きこれくらいの人数を維持しつつ、中学校、小学校の先生方が加盟していただけるようにつながりを重視していければと思います。

全日本教職員バドミントン連盟が末永く発展していくためにも、各都道府県連盟の活動が活発に継続していくためにも、経験者の採用が多くなり加盟していただける連盟にしていく必要が、今の我々の課題と思っています。

『感謝！』

愛知県教職員バドミントン連盟常務理事

名古屋高等学校教諭 佐藤 雅史

私がバドミントンを競技として始めたきっかけは、大学で入部したバドミントン部です。しかし、あまり上達せず、面白くないので、1年が経過したところで競技をやめようとキャプテンに相談しましたが、バドミントンは本当に面白いから必ず続けろとのアドバイスで続けることにしました。その後海で怪我をして、強くならないまま競技を離れ、2度とラケットを握ることはないと思っていました。

私は高校の数学の教員になることを決意して大学へ進学しましたが、教職に就く前に社会人経験を積むために営業職に就きました。入社3年目に大学の部活の仲間とバドミントンをしようと企画した合宿で、久しぶりにラケットを握りました。そのときに仲間がとても楽しそうにプレーをしていたのを見て羨ましくなりました。当時はバックハンドが打てなかったので、練習して楽しくラリーをしたいとの思いで仲間と練習することになり、練習場所であった体育館にいらしたのが東京都教職員連盟の佐藤正さん、中央大学バドミントン部監督の西山博司さん達。最初は近くで打っている姿を拝見して感動。やがて一緒に基礎打ちやゲーム練習をしながらバドミントンの楽しさ、素晴らしさを数えきれないほど教えていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。29歳のときに、高校時代に父親の転勤先で通っていた母校の名古屋高校で教員となりました。バドミントンの楽しさを伝えたいという思いで、2年目にバドミントン部を創部し、部員1名からスタート。現在部員は高校生123名、中学生62名で、高校は現在県大会第5位。金曜日の夜や週末の練習はオープンにして、実業団選手や社会人選手にも学校に練習にきていただいています（現在は自粛中）。

応援の力を教えていただいたのもバドミントンです。第52回全日本教職員大会のエアコンのない体育館での準々決勝で、1時間近くに渡るとても苦しい試合でしたが、県内の選手達からの声が心の奥深くに伝わり、それが力となって発揮することができ、念願のメダルを獲得することができました。

私は常に感謝の気持ちを持ち、バドミントン競技の楽しさ、そして応援の力を伝えることがバドミントン部の監督としての使命だと思い、どのチームよりも、楽しくプレーし、元気に応援しあえるチームを作ってきました（現在声を出しての応援は自粛）。その結果が大会の成績に繋がっていくと思っています。私自身も練習仲間、パートナー、対戦相手、監督、応援、役員、バドミントンに関わるすべての人々に常に感謝をしながら、一生バドミントンを続けて、バドミントンの楽しさを広めていきたいと思っています。



岐阜県の教職員連盟と私

岐阜県教職員バドミントン連盟

会長 武藤 芳紀

第3回から一般女子単で高木紀子選手、一般女子複で高木（現姓中山）紀子・天野博恵組が7連覇、第4回から一般女子団体で6連覇を達成するなど、全日本教職員選手権大会の草創期に岐阜県は輝かしい実績を残している。そのころ、私はまだ小学生であり、大会実績も後年記録で辿っているだけなのであるが、バドミントンを始めるきっかけを述べてみたい。自分の通っていた小学校に東海女子短期大学（現東海学院大学短期大学部）から大勢の教育実習生が来ていた。自分の担任の先生が体育の専門であったことから「短大から教育実習生の指導にバドミントンの世界チャンピオンが来てくださる」と聞き、クラスメイトがどよめいたことを記憶している。バドミントンについて体育館で行うことすら見当がつかなかった私たちに、担任の先生がいろいろと説明してくださった。ユーバー杯獲得メンバーであった天野博恵先生が東海女子短大で教鞭をとっており、そのため担当学生の指導に来校されたのであった。残念ながらこのとき私が直接天野先生に話を伺う機会はなかったが、実習期間を終えた学生が記念にバドミントンのセットをクラスに贈ってくれた。レクリエーションとして捉えられがちであったバドミントンを競技として意識し、中学生になってから部活動に入部することに繋がったのは、天野先生の存在が大きかったように思う。

天野先生はその後、広沢功子先生とのペアでも一般女子複で優勝されている。私が高校1年生のとき、3級公認審判員資格を取得した。中部日本選手権が岐阜県で開催されたからなのであるが、3級にも関わらず主審を担当した最初の試合がこの年の全日本教職員大会一般女子複優勝の広沢功子・名和和子組の試合であり、もたついている私に指導をしてくださったのが広沢（現姓伊藤）先生であった。現在B級レフェリーである私の審判デビューの思い出である。

私は高校教諭となったと同時に県高体連専門部役員となり、長年高校生部員を指導してきた。いつしか岐阜県教職員連盟の取りまとめを務めることとなり、自身も全日本教職員選手権大会に出場してきた。一般男子団体の監督として臨んだ2015年の奈良大会において、岐阜県は見事初優勝を成し遂げた。優勝メンバーである黒田匠馬君は県高体連で、平池直哉君、大橋擁太郎君は県中体連でそれぞれ中心となって活躍してくれている。今後も多くの先生方の教職員大会での活動がその後の選手指導に結びついていくことを祈念している。

先輩からの学び

愛媛県教職員バドミントン連盟

事務局 宇都宮 正多

日本教職員連盟60周年を迎えられますことを心からお祝い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、第59回大会と第60回大会が中止となり、3年ぶりの開催となる第61回大会を愛媛県で開催することとなりました。本県では今大会で30回出場となる方が3名、10回出場となる方が1名いらっしゃいます。全国大会を始め、県連盟主催の大会にも積極的に参加し、成果を上げ続けていただいた結果です。

私はこれまでに部活動の顧問・ジュニアの指導・教職員連盟の事務局などの様々な場面でバドミントンに携わってきました。バドミントンの裾野を広げるために教員として何ができるのか考えて取り組んできたつもりでした。県の教職員大会で、ある先輩に「バドミントンはやっていますか？」と問われたことがありました。当時の私は、公務の多忙に加え、部活動の顧問でもなく、日常的にバドミントンの練習などを行っている状況ではありませんでした。全国大会への参加も家庭や校務の都合でお断りをしていました。しかし、先に挙げた全国大会出場を重ねてきた先輩方は自分がバドミントンを楽しみ、自分のためにバドミントンをやっています。そんな姿がこれまでの私の間違った考え方に気づかされました。そして、自分が一生懸命やっている背中を見せて、後輩や子どもたちがいつまでもバドミントンを続けたいと思えるような指導をしていきたいと思うようになりました。このことは、公務や子育てなどでも同じことであり、自分が頑張っている姿を見せて、周囲に影響を与えることのできる人でありたいと感じています。また、本誌への執筆を通して、その考えを改めて見直すきっかけを与えていただき感謝しています。現在はジュニアの指導に関わることが多く、小学生の子どもたちに楽しさや成長できる喜びを伝えるため、私自身も共にトレーニングをし、ラケットを握っています。

冒頭でも触れたように、今年は愛媛県で第61回大会が開催されます。本県開催ということで、これまで全国大会に参加したことのない選手や運営に参加していただける教職員の方が多くいます。これを機会に愛媛県教職員連盟として、教職員同士のつながりを強くし、バドミントンの発展のために活動していただける人材を増やしていきたいと思います。新型コロナウイルス感染症の影響で何かと不便をおかけすることもあります。本大会が無事終わることができるよう精一杯頑張りたいと思います。

東京都教職員バドミントン連盟前会長水上英二先生のこと

東京都教職員バドミントン連盟

理事長 須田 和裕

東京都教職員バドミントン連盟にはバドミントン界に多大な貢献をされた多くの先輩方がいます。ここでは昨年まで東京都教職員バドミントン連盟の活動を牽引してくださった前会長である水上英二先生を紹介させていただきます。JEFNEWSにすでに訃報が掲載されましたが、残念ながら2021年10月に急逝されました。その一報を聞いたときは非常にショックを受けました。その少し前までメールをやり取りしていましたが、しばらく返信がありませんでした。返信がこないことは時々あったので先生が亡くなり返信が来ないなんていうことは全く想像できませんでした。

水上先生に最初にお会いしたのは私が初めて東京都教職員バドミントン連盟の練習会に参加した時でした。会場で先生から声をかけていただいたので、知り合いがひとりもいなかった私も、すぐに緊張がほぐれました。とても社交的な方で、教職員の全国大会に出場されている先生方にも交流があった方が多いと思います。バドミントンにかける情熱は並外れており、その実力は全国大会で何度も優勝されていることからわかると思います。ご自分の練習ばかりではなく地域のバドミントンの発展にも力を注がれていました。東京の西部、八王子や町田の高校で勤務していた期間が長かったのですが、授業後の体育館を使い午後9時とか10時からでも参加できる夜間のバドミントンの練習会を催していたそうです。高校生はもちろんのこと社会人の多くも参加していたと聞いています。このため東京の西部のバドミントン愛好者の多くが水上先生のお世話になったようです。退職後も近所の小学校の体育館開放を利用して「夕焼けクラブ」

というクラブで子供たちにバドミントンを指導していました。また八王子市のバドミントン連盟の仕事も多く引き受けており、長年実施されている八王子オープンは自慢の大会でした。家にいるときは愛猫を横にウイスキーをちびりちびり飲みながらパソコンでバドミントン関係の資料づくりをしていたと聞いており、電話をかけるとときどき猫の鳴き声が聞こえました。

東京都教職員バドミントン連盟は創立から60年以上過ぎ、周年行事を企画していました。まだ記念式典は新型コロナウイルス感染拡大防止のため出来ずにいますが、この式典と記念誌の準備も水上先生を頼りにしていました。このために作成した資料は水上先生のパソコンの中に存在し、また最初からやり直しをしなければならないかもしれません。いつまでも水上先生に頼らず早く仕事を引き継いでおくべきでした。そしてまた次の世代に引き継ぎたいと思います。

バドミントンに情熱を捧げた東京都教職員バドミントン連盟前会長水上英二先生の紹介をさせていただきました。

「これまでのJEF活動を振り返って」

広島県 板垣 哲司

私は現在、広島県立庄原実業高等学校に勤務しています。農業科教師として広島県立西条農業高等学校からそのキャリアを始め、山口県立山口農業高等学校を経て現在の勤務校が3校目となります。JEFとの出会いは、西条農業高校で生徒たちに祭り上げられ、バドミントン部顧問となり、同好会から創部したことがきっかけとなります。普段はマイノリティな教科を指導していますので、部顧問として多くの先生方と出会い、多くの学びがありとても新鮮で楽しく、バドミントン指導にのめり込んでいくこととなりました。多くの先生方との出会いのなかで、バドミントン指導を教師の核とされている先生方に出会い、導いて頂き気付けば、バドミントン指導者連盟やバドミントン学会に参加させていただきながら、バドミントンコーチ3、公認審判員資格審査認定委員として、20年近く活動を重ねることになりました。

小学生で止まっていた、私とバドミントンとの係わりの原動力の一つにJEFがあります。私は広島県と山口県で教師として勤めてきましたが、JEFの活動をとおして、多くの憧れる先生方に出会うことができました。その先生方は学生時代に競技実績のない私を温かく迎えて下さり、バドミントンをより深く学ぶこと、指導すること、県教職員がチームとしてコートで戦うこと、選手のために大会運営を滞りなく実施すること、これら多く楽しさを私に伝えて下さいました。そして、いつの間にかJEFの夏の全国大会、冬の中国大会、この2つの大会のコートに立つこと。これが私のライフルーティンとなりました。多くの先生方がそうであるように、私も年齢を重ねるごとに、学校内外の役割が増え、時間的余裕のない生活を送っています。しかし、児童・生徒たちに自己管理を怠ることなく、模範となるプレーをするためにJEFの大会があり、この目標があるおかげでこれまでの職務を乗り越えられたのだと思います。

JEFは全国大会が第1種大会として認められているなど、競技団体にはあまり見られない特殊な団体です。JFEも黎明期は普及のため、諸先輩方が指導方法や環境を構築されました。現在はその積み重ねのうえで、さらに高い競技力を求めています。現在の日本の世界ランキングは2位ですが、これはこれまでの諸先輩方の取組が成果となって表れていると思います。しかし現在は学校教育から部活動を切り離すことが議論され始めており、「学校でスポーツを普及する」時代からの転換期なのかもしれません。しかし、一方で教師がスポーツの指導にあまり係らない小学生の全国大会を保護者や指導者の愚行を理由に、閉じた競技もあります。加熱し続ける勝利至上主義、受験戦争など児童・生徒・学生のバドミントン活動を取り巻く環境は変化し続けています。しかし、教師のバドミントン指導に対する情熱はいつの時代も変わらないものではないでしょうか。

私がJEFをとおして多くの熱意ある先生方に出会い、児童・生徒と共に自己研鑽に努めることが継続できたことを、これからバドミントン指導者のキャリアを始める方々に伝えていきたいと思います。

人と人をつなぐ教職員バドミントン連盟

山口県教職員バドミントン連盟 事務局

山口市立鴻南中学校教諭 岡本 幸

創立60周年を迎える教職員バドミントン連盟へ感謝の気持ちを込めて、僭越ながら寄稿いたします。

さて、教職員バドミントン連盟の存在を知ることになったのは、今から10年ほど前です。東京都の教員として、高年齢で新規採用され、江戸川区の中学校に着任したことが始まりでした。バドミントン部の顧問になり、組み合わせ会議でI先生との「審判の資格を持っています。」という会話からでした。誰も知り合いのいない東京での勤務、バドミントンも部活以外でプレーできる場所も心当たりもない私に、I先生が東京都教職員バドミントン連盟の存在を教えてくださいました。ちょうど東京での全国大会の準備中で慌ただしい中でした。東京都教職員バドミントン連盟に加入し、皆さんに仲間としてすぐに受け入れていただきました。また、選手、審判としても毎年全国大会に参加する機会を与えていただきました。

そして、全国大会の会場で高校時代の恩師であるM先生との再会も果たしました。毎年会場であうたびに「いつ山口に帰ってくるのかね?」と聞かれ、他の山口県の選手の皆さんとも顔見知りになりました。

また、全国大会で審判をするうちに、全国のたくさんの審判の方々とも知り合い交流することができました。

故郷、山口県の採用試験に再挑戦し合格が決まり、恩師M先生に連絡したところ「事務局をやってもらえないか?」と言われ現在に至っています。

東京を離れるにあたり、「全国大会で毎年会えるのだから」と送り出していただいたことを今でも忘れません。

こうして、人とのつながりの大切さ、ありがたさを身に染みて感じました。まさに、教職員バドミントン連盟が人と人の輪を広げているといっても過言ではありません。

全国大会には山口県に戻ってからは選手としての参加はできていませんが、審判として毎年参加を楽しみにしています。

コロナ禍で全国大会が2年連続中止になりました。「今年こそ」と皆様との再会を楽しみにしています。

最後に、教職員バドミントン連盟でも活躍され、私も東京都で大変お世話になった水上先生との最後のお別れがコロナ禍でできなかったことが心残りです。ご冥福をお祈りします。

先輩から後輩へ、そして次の世代へ

岐阜県教職員バドミントン連盟

事務局 黒田 匠馬

私は現在、岐阜県教職員連盟に所属し9年目になります。新型コロナウイルスの流行により、この2年間、全日本教職員選手権大会が中止となっていますが、開催年は必ず出場しています。指導を一旦忘れ、全国の先生方と鎗を削る1年に1回の貴重な機会を非常に楽しみにしています。そしてありがたいことに、この8年間、教職員の代表として全日本総合選手権大会への出場を続けています。日本最高峰の大会に選手として参加することで、バドミントンの激しさや繊細さ、楽しさに触れることができ、喜びを感じています。

私は小学2年生からバドミントンを始め、大学卒業までの14年間、競技者として努力してきましたが、一度も全国優勝の経験はありませんでした。初の全国優勝が2015年の全日本教職員選手権大会でした。岐阜県連盟会長の武藤芳紀先生にお誘いいただき、一般男子団体に出場し、地元奈良県との接戦の末、優勝することができました。武藤先生や県中体連で活躍している平池直哉先生、大橋擁太郎先生らと共に、日本バドミントン協会1種大会メダルを手にした時の喜びを忘れることはありません。

現在は岐阜県高体連専門部の役員として、高校生の強化を担当しています。武藤先生には、大会運営や組合せ作成等でご指導いただき、大変お世話になっています。強化部門では、中体連の平池先生、大橋先生と連携し、中高一貫練習会を実施するなど、教職員連盟を通じたつながりが指導現場で活かされています。指導した生徒の中には、教員志望の生徒が多くいます。指導した生徒が教職員として岐阜県に戻り、共に指導ができる、そして教職員選手権大会で共に戦う日が訪れることを楽しみにしています。教職員連

盟の先輩から受け継いだ財産を次世代へ繋げる役目が少しでもできるよう、微力ながら尽力していきたい
と思います。

派遣審判員として参加して ～審判員として先輩方から受け継いだこと、これからの方に伝えたいこと～

日本教職員バドミントン連盟 中国ブロック理事
岡山県教職員バドミントン連盟 理事長 市川 佑

日本教職員バドミントン連盟の創立60周年にあたりまして、心よりお祝い申し上げます。

私は全日本教職員バドミントン選手権大会に派遣審判員の制度を利用して、これまでに4回審判員として参加させていただきました。派遣審判員制度は1999年から導入され23年前から続いていると伺いました。その中で「たかが4回…」の参加回数にとどまっている私が、数多く参加されておられる諸先輩方を差し置いて筆を執るのはおこがましいですが、私の審判員活動にとってなくてはならない大会となっていますので、少しお話をさせていただきます。

私が派遣審判員として初めて参加したのは2013年宮崎大会でした。その頃は私自身国際審判員の受験を目指していた頃で、全国から集まる経験豊富な審判員の方々と一試合ごとに中身の濃い審判談議ができる環境があることに、とても刺激を受けました。また、当時日本教職員バドミントン連盟理事長（現会長）でBWF国際レフェリーの高橋英夫先生や、事務局長（現副理事長）でBA国際審判員の上田敏之先生、また派遣審判員で参加されておられたBA国際レフェリーの三王知治さん（広島県）から、受験に向けての心構えや、自分のアンパイアリングについてご指導いただき、とても貴重な時間を過ごさせていただきました。

その後、2014年東京大会、2016年鳥取大会、2018年愛知大会と参加させていただきました。教職員の方が集まる大会ということで、試合直後に選手の方と試合の中で起こった状況について、ルール適用についての話をすることもたくさんありました。試合を通して反省し、自分のプレーや児童生徒への指導に前向きに生かそうとする姿勢は、さすが教職員大会！という雰囲気でもとても誇らしく、そして私が大好きな大会である由縁なのであります。それに加えて、派遣審判員の方々と大会を通じて研鑽を積んだ経験を地元の審判仲間の審判技術向上に還元できていることが、この大会が創設した派遣審判員制度の大きな功績であることを、実際に参加した者として大変実感しております。今後もこの制度を利用して、全国からそれぞれの地域で指導的立場となりうる審判員の方が数多く参加されることで、派遣審判員制度の意義が深まり、更に発展していくことを切に願っております。

近年、新型コロナウイルス感染防止のため全日本教職員大会を開催することが難しく、ここ数年寂しい夏休みを過ごしております。開催地の審判員の方々との交流や、全国から集まって来られる派遣審判員の皆さんとの審判技術向上に向けての中身の濃い話が再びできるようになりますことを切に願っております。

最後になりましたが、日本教職員バドミントン連盟の更なる発展を祈念しております。



第53回全日本教職員バドミントン選手権大会 2014. 8. 10～14 東京都
全国派遣審判員懇親会 2014.8.12 新小岩香港亭

2014年東京大会 全国派遣審判員の皆さんと



2018年愛知大会にて 派遣審判員として参加されていた BWF 国際審判員辻中孝彦先生（鳥取県）によるワンポイント講習会が開催されました。

「人生を変えてくれたバドミントン」

奈良県教職員連盟

代表 西川 幸佑

私は中学校、高校の頃は陸上部に所属しており、バドミントンは大学生になって始めました。大学生から始めたものですから、周りは経験者ばかり。大学生生活の4年間、公式試合では一度も勝ったことはありません。試合だけでなく、入ってくる後輩も経験者がほとんどですから、部内の後輩にも負けてしまう、という大学生活でした。

大学を卒業し、中学校の教員になり、初任校でバドミントン部の顧問を務めることになりました。そこで中学校の教員の先輩である、嘉生寛先生、平岡篤司先生、千田宏之先生に出会いました。

3人の先生方は自分が「バドミントン経験者」（といっても1勝もしたこともないボンコツ経験者…）ということを知ると、「練習においでや」と声をかけてくれました。

おそろおそろ最初に練習に行ったとき、先輩方の華麗なプレーに度肝を抜かれました。「えっ、めちゃくちゃ上手いやん…何この人たち!？」と感じ、同時に「経験者だなんて言ってしまって、恥ずかしい…」と情けないような申し訳ないような気持ちになった事を覚えています。そしてこの先生方が全日本教職員大会では上位入賞しているすごい先輩方ということを知りました。

しかし、先輩方は、私のレベルの違うプレーを見ても、否定することなく「一緒に試合に出ようか」「練習においでや」と声をかけ続けてくれました。

なんだか、素直に嬉しかったのだと思います。

聞くとところによると、嘉生先生は全日本教職員大会に奈良県からお一人で参加されていた時期があったようです。平岡先生、千田先生が教員となった頃に嘉生先生は「全日本教職員大会に出ないか」と誘ったようで、平岡先生は「嘉生さんがいるから今バドミントンを続けている」と言っていました。

強く、優しく、時に厳しい、そんな先輩たちに憧れをもって今も一緒に練習させてもらっています。嘉生先生、平岡先生、千田先生、この方達に会わなかったら、間違いなく私のバドミントンは大学生で終わっていました。自分の人生を大きく変えてくれたバドミントン、そんな大きなきっかけを頂いた先輩方。これからも一緒にバドミントンをさせてもらえたら嬉しいです。そして自分もなれるかは分かりませんが、「西川先生に会ったから自分の人生変わった」と言ってもらえるような先輩になり、その思いを後輩につないでいきたいと思っています。

プレイヤーとして指導者として頑張れ!!

福島県教職員バドミントン連盟

会長 橋本 遊二

本県の教職員連盟で現在活動している主な若手メンバー（後輩）に対し、強い期待を込めて叱咤激励する。まずは本気でやれば強いシングルスプレイヤー齊藤清人。潜在能力は高いが優しい性格が災いし“ここ一番に”弱く、ファイナルゲームで勝った記憶がない。毒舌の大川浩史、チームドクターの土佐正規とのダブルスでも活躍。

全日本総合の出場選手である齋藤亘、本多裕樹。日本を代表する強豪チームの指導者として、またジュニアナショナルチームのコーチとして多忙だがコートでの英姿を見たい。

同じく全日本総合選手である二瓶良、村越雄太。今はチーム指導が中心だが、佐藤慎也を含めて現役選手として頑張っている。

一般男子団体と成壮年団体の優勝メンバーである渡部訓生、竹俣洋平（ともに福島国体で準優勝）朝倉裕朗も上記の選手同様本県にとって優秀な指導者ではあるが選手としてコートに立って欲しい。

女子メンバーとしては全日本総合選手の川田依香を中心に、糠沢每子、寺田加奈、齊藤柊子、小平優香。家庭や職場など大変だろうがよく頑張っていると思う。小生はチカラになれないが継続して欲しい。何よ

り女性がコートで頑張っている姿は美しい。(私見?)

そして、これまで事務局として又選手として、又選手としてその役割を果たしてくれたPCに強い高木孝文・奥さんに弱い朝倉裕朗・粘りのプレイヤー鈴木秀樹・優れた事務能力の樋口智哉(現事務局)。本当によくやっている。今後も指導者としては勿論プレイヤーとして頑張してほしい。

「先生、そのラケットはウッド(木)ですか？」

神奈川県教職員バドミントン連盟

高輪中学校高等学校教諭 源 大輔

杉田博先生と私のことを書かせていただきます。

杉田博先生は、令和3年11月25日にラケットを置きました。88歳でした。

先生の教え子で教員をしているのは静岡県星陵高等学校の吉永将史先生と私、後輩で中学教師の三人です。吉永先輩は、中学時代も全国で活躍し高校時代も全国選抜大会で準優勝と輝かしい成績を残しているの、憧れの先輩です。ところが私は、高校からバドミントンを始めた『初心者』です。入部の理由は、「バドミントン部の女子は皆カワイイよ!」という私が簡単に引かかる友人のウソでした。そんな私が教員になったことが杉田先生の偉大さを表していると思います。

先生の指導は、厳しくもあり優しくもありでした。私は俗に言う『悪い子』なので、よく叱られました。悪戯ばかりしてゲンコツを食らう事が多々ありましたが、「外で喧嘩はするな!警察沙汰になったら出場停止になるぞ!」と絶対にしてはいけないことは、冷静に諭してくださいました。

「コートに入ったら誰も助けてくれないぞ」と言われました。試合中に相手のペースの時、ラリーを取られた後に先生を見ると必ず他のコートを見ています。先生は他の試合を見て情報収集しているのですが、当時の私は「自分で何とかしろ」と言われていると思っていました。

あまり知られていないかもしれませんが、杉田先生は生物の先生です。校内に鳥の巣があり、ヒナが巣から落ちていたので、巣に戻そうとしていた時、偶然先生がそれを見ていました。先生は、「ヒナを巣に戻しても親鳥はそのヒナを落とすよ」と言って去っていきました。酷いことを言うなあと思いました但当面にそうらしく、現実には甘くないんだなあと思えられました。

親が離婚し自暴自棄になって練習をまじめにやらなくても、叱らず様子を見てくださいました。待っていてくれました。

先生は掃除や審判を率先して行います。身をもって感謝する心を教えていただいたと思っています。審判をする時、指でカウントを数える姿がお茶目でした。

自分に正直に伸び伸びと育ててくださいました。先生と試合をする時に「今日こそ負けないからな!クソジジイ!」と言っても黙って相手をしてくださいました。勝てませんでした。当時の私は、中国の韓健選手のプレースタイルに憧れていました。ラリーが1分以上になっても先生は全く動じません。53歳とは思えない体力でした。それもそのはず、「インハイチャンピオンでも勝てない。ファイナルになれば尚更勝てない。」と言われていました。高校生相手になぜファイナルで勝てるかと言うと相手の配球が解るからだそうです。

技術指導は、正に『的確』でした。例えば、ジャンプスマッシュを打ちたいと思い先生に相談したところ、メリットとデメリットを教えていただき、どういう場面で使うと良いか考えさせてくださいました。常に

原理原則を追求しているようで、無駄がないと感じました。

団体戦を大事にしていました。おかげで、アベックで関東大会に出場できました。余談ですが、団体戦オーダー用紙の監督名にかっこ書きで年齢を付け足していました。先生はOBOG会の時、犯罪者みたいで嫌だったと言っていました。

吉永先輩に「高校を卒業したら杉田先生の偉大さが分かる」と言われました。大学時代、同じ左利きの有名な後輩に間違えられることがありました。そのたびに大学の関根義雄先生が「あの子は横浜立野高校出身ですよ」と言うのですが、その返事が必ず「杉田先生の子供ですか！」でした。

教員になってからも、「あれだけの名声があれば、どこかで陰口の一つでもあるものだけど、杉田先生の悪口は聞いたことがない」と言われたことがあります。

杉田先生は教え子に「スギジイ」と言われていましたが、私は言えませんでした。

30代は出場しなかったのですが、あることが切っ掛けで全日本教職員大会に再び出場しようと思いました。その時、どうせなら在勤の東京ではなく、在住の神奈川でと考え、副会長の稲石一雄先生に相談したところ「やっぱり杉田先生と同じチームが良いか！」と快諾してくださいました。

復帰戦の薩摩川内大会は、家族を連れて行きました。神奈川チームは同じ宿に泊まりました。皆で大浴場に入りました。5歳の次男を抱っこして湯舟に浸かっている時、杉田先生はそれを見て微笑んでいるようでした。こんな私でも親孝行できたかなと安堵したことを覚えています。

皆さんは杉田先生のことを、誰に対しても腰が低く温厚な方と思われるかもしれませんが。私はそれだけでなく、非常に勝気で自分の意見をはっきり言う方だと思っています。

杉田博先生は、『男の中の男』です。

この記事を書いている今も涙がこみ上げてきます。心に大きな穴が開いていてシャトルを打つ気になれていません。

編集部註：

杉田先生は日本で最初のトマス杯メンバーであり、教職員大会も第2回より続けて参加されていました。当然、ウッドフレームの時代からです。そのウッドの時代から長くトップにあり続け、“ウッドの神様”とも讃えられた恩師を敬愛するという意味のタイトルと推察しました。合掌